

No.4. 2023. 6. 30

ぴっぴのスタッフミーティングの始まりは、スタッフ同士がお互いのことより分かり合えるように毎回順番でスタッフ1人が自分の事をたっぷりとなんでも語れるアクティビティを行なっています。現在のアクティビティのテーマが、『保育者のしごととしてやっていること』です。15年以上保育スタッフとして子ども達の傍で過ごして来て、自分の保育者としての立ち位置を振り返る良い機会だったので、自分の順番だった時に語ったことをこの場で書き記させていただきます。

『保育者のしごととしてやっていること』

(前置き文章) 自分のことを振り返ってみる時に、「何を考えているのだろうか?」「どんなことを大切にしているのだろうか?」と頭の中で思いめぐらしてもなかなか言葉にならないことがあります。

そんな時に、自分の行動・どんなふうに振るまっているのだろうか・・・を入口にすると、みえてくるものがあるのではないのでしょうか。

保育者の「しごと」とは、子どもたちの前にいる「わたし」の振るまいのことです。子どもたちの前での振るまいのすべては、保育者としての「しごと」になるのだと考えています。

しかし、たんに職業としてこなす「仕事」とは違って、そこには「わたし」という一人の人間の存在があります。

保育者の「しごと」を考えることで、選んでやっていること、仕方なくやっていること、ついついやってしまっていることが見えてくるはずですが、このように行動を入口にして、自分が大切にしていることや「こうしたい」と思っていることについて考えてみましょう。

① Q、保育者の「しごと」として、いま、やっていることを「言葉」三つを選び、その割合を下記に書き込んでください。

A、「知る」50% 「みる」30% 「きく」20%

② Q、書き込んだ割合について、詳しく説明してください。

A、保育者としてだいぶ「待つ」事ができるようになってきたと思う。保育者になりたての頃に「どんな保育者になりたいか?」と先輩保育士から問われ、その頃から言葉が足りず「出来るだけ子どもに何もしたくない。」と答えて「それじゃあ、あなたが保育士をやる意味がないんじゃない?」と言われた事がありました。この言葉のやり取りだけではまさに先輩保育士の言う通りだったと思います。当時に答えた『出来るだけ子どもに何もしたくない。』の言葉の意味については今思う考えをこの後の文章で表現できればなあと思います。

保育スタッフとして子どもと関わり始めた最初のきっかけは学生バイトとして母園で勤め始めたことでした。当初はただただ子ども達と遊ぶ事が楽しくて、幼稚園の先生(大人)と子ど

も、というよりは一緒に遊ぶ仲間という関係の方が近かったと思います。保育士の資格を取り、クラスを任せて貰える様になり、だんだんと子ども達に何かを伝える、教える。安全を守る。という感覚が強くなっていき、泣いている子どもがいたら真っ先に駆けつけ泣きを治める。喧嘩をしている子ども達がいれば仲裁に入り互いの気持ちを聞きながらその場を治める。と、<場の荒立ち>=<問題>と捉えていて、何か問題が起きると対処するという考えが先立っていました。遊びを一緒に楽しむ仲間としての自分と、クラスでの活動が円滑に進むよう問題に対処していこうとする幼稚園の先生としての自分との狭間で、この関わり方で良いのかと悶々とした思いが積み重なっていきました。今思うと、場の荒立ちの中にこそ子ども達と考える機会があったと思いますが、目先のことでいっぱいになり余裕がなかったのだと思います。子ども達と同じ目線で居たいと思いつつも、保育士として自分がどうあるべきか、頭を固くして保育者像を模索していました。よく先輩保育士に、子ども達と仲間でいたいけど、先生にならなきゃいけない場面もあり、そんな自分の中の二面生の矛盾に葛藤して相談していました。先輩保育士から言われた言葉で心に残っているのは「子ども達のガキ大将になれば。」という言葉でした。当時はしっくり来ませんでしたでしたが、その言葉が今の指針になっている気がします。

ぴっぴと出会い、大人と子どもが共に過ごす森の中で先生という立場の大人が居ないという心地良さを感じました。先生にならなくて良い、先生としての自分ではなく、自分は自分で1人の不完全な人間として子どもも大人も一緒に森の中で笑って、喧嘩して、時には失敗し、互いに協力しながら生活できているという感覚を持てるようになってから、子どもの泣きの理由、喧嘩の理由、争い事が治める対象ではなく、子どもが何を感じて心が揺さぶられているのか、声を掛けるのを少し待って子ども理解をより深められるようになってきたと思います。子ども達が何に関心を持ち、何を楽しむか、何を不快と感じるか、不快な事をどう受け入れていくのか、受け入れずに距離を取るのか、その経過を見守りながら子ども理解を深めていくことで自分の中で子ども達と関わる心のゆとりを取り戻せて来たと思っています。ここでようやく①の問いの答えに移っていきます。

「知る」は、子どもの行動、言動の意味、子ども達1人1人を知ろうとする事です。時間に追われている時、他の物事に意識を取られている時など、心に余裕を持っていないと自分自身の思いが先行しがちになってしまう事があるなど自分を認識しています。子どもの行動や言動の意味があっても、意味がなくても、「何を思い、何を感じてそうしたのだろう」と考えられる人間でありたいと思います。子ども達の感動や、怒り、喜び、悲しみなど心の揺れ動く感情に対してなぜその感情を抱いたのか、何がそうさせているのだろうとじっくりと観察する事で子ども理解を深めていきたいです。それは感動する場面に出会った時だけでなく、普段の遊びの姿から、活動をしている姿からその子どもが何に関心を示しているか、何が得意で何が苦手か、何に今興味を持ち始めているのか、普段の1人1人の子ども達の姿を知る事を大切に関わっていきたくので、保育者の「しごと」として子どもを「知る」という事が自分の中で大きな割合を占めています。

その上で、「みる」事を次の割合として大きく占めていると思いました。関わるでも、寄り添うでも、放っておくでもなく「みる」。1人1人が多様な価値観、感覚を持っていてそれを心のままに表現出来る子ども達の生活する保育の場は毎日の様に、子ども達の心が揺れ動く感動的な場面や、辛かったり不快に感じたりする場面など何かしらが起こります。感動的な場面と一緒に共有できたらなと思いますが、壁にぶつかった時には子どもたちがその事に対して自分たちだけの力で乗り越えていく事ができるのか、そこに大人の手が必要なのか、大人の手を必要としていても子どもの力を信じて待つ方が良いか、その選択は今でも戸惑い、迷いますが、自分自身も、子ども達自身も失敗しても間違っても良いから出来るだけ自分たちの力で1歩を歩み出せるようになって欲しいと願っています。じっくりと子ども達の心の揺れの経過を「みる」事でその場面を見極めていきたいと思っています。

そして最後に「きく」。子ども達を知ろうとして、見ていても心の動きがわからない時には最後に声を掛けて「きく」。出来るだけ大人の介入しない子どもたち同士のやり取りを信じて見守りながら子どもたちのことを知れたら良いなと思っていながらも、つい口出ししてしまうこともあります。そんな時には「うるさい?」「口出しし過ぎ?」と子ども達に「きく」事もあります。そんな時には「うん。うるさい。」という言葉が返ってきてそんな風にはっきり言ってくれるぴっぴの子ども達の頼もしさも感じます。待ちたいと思っていながらも口出しをしてしまう自分自身の理想と現実のギャップも痛感しています。

『保育者のしごととして今やっていること』のこの文章を書きながら、自分自身を振り返り感じたのは、最初の数値は理想で実際は「知る」30% 「みる」30% 「きく」40% だったかも知れないと思い始めました…。やっていると思っていだけれど、改めて振り返ってみるとやれていないのだと感じたことが「みる」こと。保育を志した時に言った「出来るだけ子ども（を信じて）に（口出し、手出しを）何もしない」を実現していけるように「みる」の割合を増やして「きく」の割合を減らしていけたらなあ。と思う今日この頃です。

考えの偏った文章になってしまいましたが、遊びは楽しみながらとことん関わりを持って過ごしていきたいと思っています！子どもの自ら歩み出す1歩を信じて待てる人でありたい。そうあり続けたいと思います。

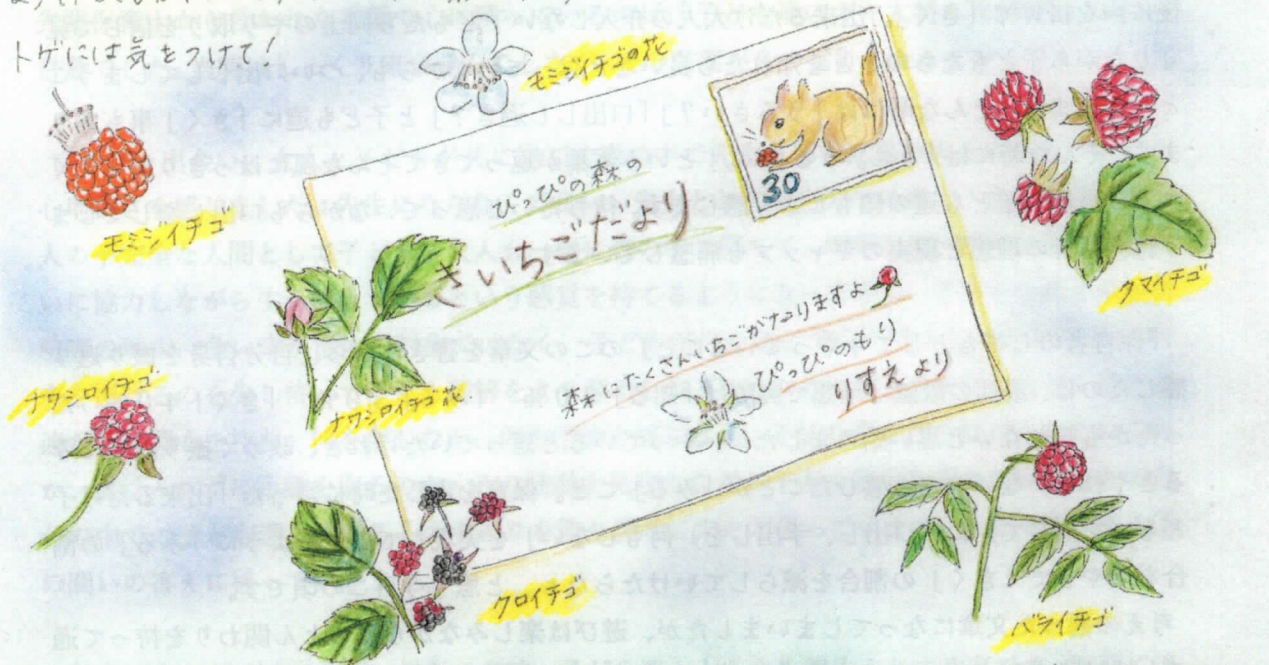
長々と思ったままに書き綴り読み辛い文章、乱文となりすみません。ご精読ありがとうございます。

: 菅 悠介

森と絵本と巡る季節

7月

今年も「さいちごたより」の季節がやってきました。古矢一穂さん(絵)と岸田紗子さん(文)のコンビが描く絵本はどれも大好きなのですが、この「さいちごたより」(福音館)はとっておススメです♪ びっぴの森や軽井沢周辺の森や野原にある木苺たちがたくさん登場しているのですが、そのいらごたちと『のほけびがし』の『うさぎのうさぎ』さんや『みらくさくげ』の『りすのりすえ』さんをはじめとした動物たちが季節ごとにお手紙で紹介してくれているのです。また木苺の絵は本物と同じ大きさで詳細に描かれ、図鑑としても楽しむことができます。びっぴの森にも本にのっている木苺が4種類あり、先日、昨年の卒園記念植樹で「もみじらご」も中間入りしました！子どもたちと木苺の風景はまるで絵本の中にいるようで、とてもかわいいですね。一緒に森の中を歩きながらぜひ、探してみてください♪ あ、バラの仲間なのでトゲには気を付けて！



それから、「もみじらご」なのですがとても美しくかわいらしい苺なので数々の絵本に登場しています。

一番有名なのは、『ぐりとぐらのえんそく』に登場しており、ぐりとぐらが会ったアツさんの庭に苗を植えています。そして、また岸田紗子さんと

ぐりとぐらの絵の山脚ゆりさんの『みんなあそびました』は表紙にも描かれ、お話の中で大きく登場します。

そして、さいちごみに思わずかけたくなる？絵本。

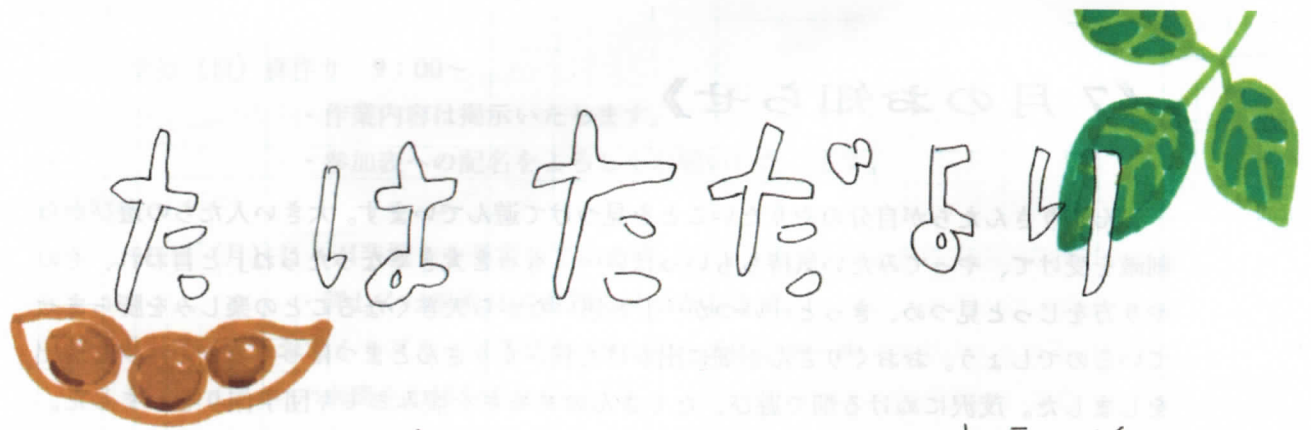
『ひめおすみのみま』(自石美子さん)でももみじらごが登場！

ページいっぱいにさらさらと美しいもみじらごの森が描かれていてみまもとも

うとりしています。くっしん坊の娘も息子も大好きな絵本。みなさんぜひ絵本に森に楽しんでみてくださいね

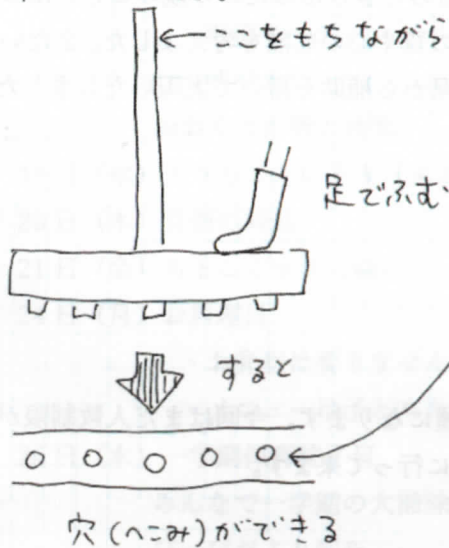


たはたた♪



6月19日(月)、おおきいくみのみんなと大豆の種をまきました！ あやふやな雨降る？ 降らなくても寒い？のお天気に、延期をくり返し、この日なら行けそう！
 という日は色の時間のある日。

午前中に色の時間を過ごし、お弁当を食べて畑までの道のりをいざ出発！ わたしはというと、その日は畑で大豆をうえる穴(へみ)をあけて子どもたちを待っていました。



そこに大豆を2粒ずつおいて、土をかぶせます。
 が、その日は暑い日で土が乾いてカサカサで、穴がはっきりしない。わかりにくい状態。穴とは別のところに1粒ずつ植えていたり、植えたのか植えてないのかわからないところも... 芽が出たらわかるのが楽しみです。

去年は味噌づくり用の大豆までは4x穫できなかったの。今年は4~5倍!? 種をまきました。たくさん4x穫ができれば、味噌、きなこ、のほかに豆乳や豆ふや系内豆、しょうゆ??...
 蒿はふくらみます。